

## 思考と表現\*

— ジャン・ギットン先生から学生への勧め —

森 川 甫\*\*

### はじめに

神戸海星女子学院大学での3年間研究演習、ついで、関西学院大学社会学部のフランス哲学・思想購読演習、大学院文学研究科（哲学特殊講義、教育学特殊講義）において、20世紀カトリックの代表的哲学者、作家のジャン・ギットン<sup>1)</sup>の思考と表現を研究題目として取り上げてきた。

ギットン教授には思考や表現に関して次のような著述がある。

*Le Nouvel Art de penser*, Aubier, 1946.<sup>2)</sup>

*Le Travail intellectuel*, Aubier, 1951.<sup>3)</sup>

前者は、思考術の養成を、後者は、読書と思索と文章表現を説いたものである。ギットン教授の思想的背景には、パスカル<sup>4)</sup>の思考に関する深遠な思想があり、パスカルはこの主題を、二大主要著書、『パンセ』<sup>5)</sup>、『プロヴァンシアルの手紙』<sup>6)</sup>、及び、小品『幾何学的精神について』<sup>7)</sup>において扱っている。

思索と人間の尊厳についての次の断章は、ギットン教授の思想的背景をなしている。

L'homme n'est qu'un roseau, mais c'est un roseau pensant. Toute notre dignité consiste en la pensée. C'est de là qu'il nous faut relever, et non de l'espace et de la durée, que nous ne saurions remplir. Travaillons donc à bien penser. Voilà le principe de la morale. (L. 200)<sup>8)</sup>

「人間は一本の葦にすぎない。しかし、それは考える葦である。私たちが立ち上がらなければならないのは、そこからであり、私たちの満たすことのできない時間や空間からではない。だから、よく考えるようにつとめよう。そこに道徳（生き方）の原理（始まり）がある。」(L. 200)

以下、思考力の養成、説得術、文体と文章について考察する。

### 第1章 思考力の養成

ギットン教授は思考力の養成を次のように勧める。<sup>9)</sup>

#### I. 思考の始まり

思考の教師とも呼ぶべき人の教えに耳を傾けると、考える第一の要件は、自分の中に驚異・感動

\*キーワード：ジャン・ギットン、思考、表現

\*\*関西学院大学名誉教授

1) Jean Guittou (1901-1998)、パリ大学教授、アカデミー・フランセーズ会員。1965年、パリ大学博士論文提出候補者リスト登録の予備試験口頭試問を、筆者はギットン教授から受けた。

2) 渡辺 秀訳『新しい思考術』中央出版社、昭和56年

3) 安井源治訳『読書・思索・文章』中央出版社、昭和56年

4) Blaise Pascal (1623-1662)

5) *Œuvres Complètes, Pensées*, éd. Lafuma, 1963. (略記号 OCL.)

6) *Les Provinciales*, Garnier, 1965. (略記号 PC.)

7) *De l'Esprit géométrique*, OCL.

8) OCL. は éd. Lafuma の略号。

9) J. Guittou, *Le Nouvel Art de penser*, 『新しい思考力』参照。

の能力を養うことにあろうと指摘し、受動的驚異と積極的驚異について述べている。

### (1) 受動的驚異

何も努力しないのに、私たちの中に生じる奇異の印象である。思考の最初の印象が私たちの当惑と同時であるのは何故であろうか？どの旅行、どの転居、どの脱走も思考を隠し持っているからである。田舎の人が初めて都会に出ると、彼にとってはすべてが驚きなので、彼は考える。抑えることのできない考えの中で、都会とは何か、田舎とは何かを考えるのである。物事は対照と比較によって知られ、2つの現実を同時に知ることになる。2つの現実の比較から結果として真実が生じる。

Lucen demonstrat umbra. (影は光を示す。) 存在するのは、光でも影でもなく、両者の間に常にある関係であり、結婚である。旅行者は自分が見知らぬ土地を歩いて探検していると思っているが、彼らがしばらくして反省してみると、外国が変っているのはその住民のせいではなく、奇異の印象は旅行者がそこで受け取った感覚と自分の持つ記憶とを絶えず比較するところから生じる。結局、その遠い地で判読し、発見するのは、自分の生れた国の反映であることが分かるであろう。1つのことを考えるためには、またおそらく、それを認めるためには、それをその反対のことに関係させなくてはならないからである。

### (2) 積極的驚異

この驚異は自分の中に問いかける中心とその場を作ることである。自分に問題を提出することであり、解決可能の形式を構築することである。他人の助けを借りずに、自分が読もうとするもの、見ようとするものを想像すること、つまり、検討する主題を見通し、予感し、期待を投げかけること、要するに、見ようとするために想像すること、あるいは、あらかじめ感知することである。自分が何を求めているかを知らない人は、発見することも知らないであろう。

あらかじめ作った設計図が現実と一致しているかどうかということは、重要なことではない。それは厳密に言えば、不可能なことである。それは、また、望ましいことでもない。発見するように期待していたことを見出すのではなく、大切な

のは期待していたことと見出したこととの相違を意識することであろう。この相違の意識こそ、すぐに思考をほとぼしらせるのである。

## II. 思考の2つの形式、判断と発想

第一の思考は評価と判断である。人間は外物のなすがままにはなっていない。人間は感覚に入ってくるものを支配し、そして、感覚に入ってきたものを、存在するものと比較し、それから判断する。考えるということは、真と偽を識別すること、また、過度のもの・不足するものと完全なものとを識別することである。

第二の思考は発想である。発想とは可能の世界に入ること、まだ存在していないが、存在するかもしれないものに、ある姿を与えること、それは非常に楽しいことである。

精神には2つの種類がある。第一の種類の精神は測定、判断、均衡、精確、忍耐への素質を持っている。緩慢ではあるが、確実な精神であり、想像力が欠けているから、凡庸、遅鈍に見える。この人々の知性は他人が提供した素材に働きかけ、実践の領域では、確固とした頭脳を持っている。学問の領域では、準備や制御コントロールの仕事に貴重なものである。とくに、経済、財政、金融、教育、訓練に関連した仕事において重要なものである。第二の種類の精神は創造的な素質を持っており、現実から遠く離れているという危険を伴う。こういう人がいなければ、人間は日陰で時を読み、舵なしで航海をし続けていたであろうし、自動車が発明されたかどうか分からないであろう。何事でも変化させるためには、想像を働かせなくてはならず、不可能を強いなくてはならない。将来を動かしてゆく精神が存在しなかったならば、私たちがつながっている現在が永遠に現在であるだろう。

## III. 思考力の養成

ギットン教授は思考術として、選択、区別、反論を採り上げている。

### 1) 選択

思考の第一の基準は「選ぶこと」選択することである。イギリスの諺に I like my choice. があると言う。生あるものとは、選択する器官のことで

ある。明晰な精神を持つヴァレリー<sup>10)</sup>は「選択の神秘というものが発想の神秘と区別されるとしても、それは後者よりも小さな神秘ではない。」と言っている。選択のためには、他のものを排除しなくてはならない。選択はただ1本の線だけを保留するものであるから、その排除は無限のものである。この選択の動機は、私たち自身の奥底に秘められた好みをあらゆる命令からでなくて、どこから生じるであろうか。

1つの選択は、1つの判断を示し、それはすでに思考に属している。読書の抜書きは考え方を学ぶためのつつましいけれども、立派な方法でもある。抜書きノートは、自分を知る手段であるだろう。

読書を取り上げてみよう。読むこと *lire* は、選ぶこと *élire* である。読書とは選択すること、様々な段階において選択することである。年々発行される多くの本から手元に置く1冊の本を選び、その1冊からいくつかの章を選び、その真実を私たち自身のなかに吸収するために、繰り返して読む。1つのエッセンスを表すような1ページを選んで、読み返し、理解し直し、暗誦して、そのページに自分の心を委ねること、すなわち、一途にそれを愛好し、それを記憶することである。

さらに、読書とは、1つの文句、1つの詩句、1つの文章というように何かある単純なただ1つのものを、ピラミッドの頂点として、あるいは、蒸留された最後のエッセンスとして、つまり、その粋を与えるものとして捉えることである。そうすることによって、私たちは城塞の鍵を持つことになる。いつも心に浮かぶ1つの句によって、その章の周りを作り、その章の周りに、本を作る。第二義的なものをすべて除いて、本質的なもののみを留めようとするこの強烈な意思によって、私たちは知的王者になるのであり、多くのものを支配することになるのである。

## 2) 区別

プラトン<sup>11)</sup>によれば、名称は教示を含み、特徴的である。プラトンは一つの区分法を教え、その方法はよく考える術の本質を含むもの、少なくともその必要な準備となるものと思っていた。良い弁証家は主題をその自然な文節に従って切り分けなくてはならないと、その主題のなかに自然の分割線を、境界を、縫い合わせ目を認めるということを意味する。プラトンの区分法とは2つに区分することである。そこには深い思想が隠されているから、この区分法は素晴らしい思考手段である。

1つに見えて実際は2つであるような観念がある。ギットン教授は結晶学から喩えを引いている。結晶の中には幾何学的、規則的な形を採るもののほか、他の形とは離れて分類されているもの、「十字形結晶」と呼ばれるものがある。十字形結晶は同種類の二つの結晶で成り立っているもので、2つの結晶が互いに違った面を採って、交錯するようになっている。私たちが絶えず使っている観念は、しばしばこの左右不均衡な結晶体ようになっている。考えるという第一の仕事は、そういう1つになっている観念を分解して、それぞれを別々に取り扱うことも、対立させることもできるように、異なった名前をつけることであろう。

## 3) 反論

「思考は自分に反対する立場から、また、自分のうちに感じられる矛盾から離れられない」とギットンは指摘する。ソクラテス<sup>12)</sup>は友人たちに質問して悩ませたが、彼自身も悩ませた。プラトンはソクラテスに対立した人物を登場させ、その人物に抗弁させた。アリストテレス<sup>13)</sup>はまず自分の進む道に障害物を置いて、次にそれを取り除いた。聖トマス<sup>14)</sup>は *Summa theologia* (『神学大全』)において、そのすべての小節に“*Sed contra est...*” (しかし、反対説は...である。)という言葉を用いている。現代では、ベルグソン<sup>15)</sup>は障害物を要求した。

10) Paul Valéry (1871-1945) フランスの詩人、思想家。

11) Platon (前427-347) ギリシャの哲学者。

12) Socrates (前470-399) ギリシャの哲学者。

13) Aristoteles (前384-322) ギリシャの哲学者。

14) Thomas Aquinas (1225-1274) イタリアの神学者、哲学者、聖人。

15) Henri Bergson (1859-1941) フランスの哲学者。

自分の中に論敵を住まわせること、その論敵にあらゆる抗弁の自由を与えること、それは思考の領域では勇気に似たことである。「反論を通過した思考は試練を経験した思考である。」「試練を経た思考は証明された思考と同じではないにしても、困難な道程を通ることによって柔軟性と弾力性を備えている。」とギットンが説く。このような思考は何を恐れることがあろうか。その思考は論敵の根拠を受け入れている。相手にまず、「発砲したまえ」と言ったのである。苦労を重ねたけれども、結局、勝ったのである。はじめに譲歩する者は勝利を告げる者である。

ギットン教授は学生たちに次の言葉を勧めている。一番良く思考を助ける言葉はどういうものであろうか。「それは、くこれに対してある人は、...」(反対説が入ってくる)、くなるほど...」(譲歩する)、くしかし、...」(そこで判断を下す。)の3つの言葉である。あなた方は思い浮かべた観念にこの形式を当てはめてみなさい。そうすれば、多分、思考が生じてくるだろう。」と。

思考を刺激してくれる作家がある。各人が自分を考えさせてくれる作家を選ぶべきである。そういう作家には、いくつかの意見が保留されているのが認められる。パスカルは彼の精神と全く反対であったモンテーニュ<sup>16)</sup>を放さなかった。そして、パスカルは懐疑論者よりも、懐疑論者の議論に大きな衝撃を受けた。ギットンは注意を喚起する。「私が懐疑を勧めているとは思わないでもらいたい。私の考えでは、懐疑は偏見に似たようなものである。人は額に汗して、自分の信念を回復すべきである。その回復に一番よいことは、他人の攻撃に耐えるということである。」と。

ギットン教授は「手段と目的を混同してはならない。思考に役立つ方法を思考そのものと混同してはいけない」と忠告している。本質を選ぶの

は、本当に本質であるときだけでなければならぬし、概念の区別を主張すべきであるのは、その区別によって概念がさす存在とその存在自体とのつながりが発見できる場合のみであり、反対を述べるのがよいことであるのは、パスカルのように2つの説の一致を発見できる場合だけであると、ギットン教授は説いている。議論のために議論の技を磨き、反対するために反対する技を身につけるのではなく、一致と前進を求めため考える技を養うのである。ギットン先生の説く思考術の養成はきわめて建設的、建徳的である。

## 第2章 パスカルの表現技術

ギットン教授の重要な思想的背景をなすパスカルは表現技術に関する文書を書き、それを実践している。

説得術 *L'art de persuader*

- 1) 説き伏せる法
- 2) 気に入る法

パスカルのレトリックに関しては、アルノー<sup>17)</sup>やニコル<sup>18)</sup>が賞賛したけれども、レトリック研究の専門家のあいだでは、あまりとり上げられていない。古典時代のレトリックに関する優れた著作でさえ、パスカルの名前すら記述していないとドミニク・デコットが指摘している。<sup>19)</sup>パスカルが強力な体系的理論を持っていたことは、マルク・フュマロリ、フィリップ・セリエ、ミシェル・ゲルンの指摘している<sup>20)</sup>ところであり、1985年に、ドミニク・デコットが *L'Argumentation chez Pascal* (『パスカルにおける論証』) の題目でパスカルの作品における論証 *argumentation* について詳述している。<sup>21)</sup>グレーズの姉、ジルベルトは弟の作品執筆の方法に注目して、「述べたいことをすばらしく容易に表現する天性の雄弁を与

16) Michel de Montaigne (1533-1592) フランスの思想家、ボルドー市長。 *Essais* (『随想録』)

17) Antoine Arnauld (1612-1694) ポール・ロワイヤルの代表的神学者、ソルボンヌの博士。

18) Pierre Nicole (1625-1695) ポール・ロワイヤルの神学者。

19) Descottes, Dominique, *L'Argumentation chez Pascal*, p. 25.

20) Fumaroli, Marc, "Pascal et la Tradition rhétorique gallicane," in *Méthode chez Pascal*, pp. 359-370.

Sellier, Philippe, <Rhétorique et Apologie: "Dieu parle bien de Dieu">, in *Méthode chez Pascal*, pp. 373-381.

Le Guern, Michel, *L'image dans l'Œuvre de Pascal*. 1969, 284p.

21) Descotes, Dominique, *L'Argumentation chez Pascal*, 1985. - 3 vol., 993f. Thèse, Université de Paris-Sorbonne, 4 :1985.

えられていた弟が、力強く語るのに持っていた賜物を支えるために、ひとがまだ備えていない規則を作りました」<sup>22)</sup>と書いている。

パスカルの受けたレトリック教育についてはほとんど知られていない。文法規則によって、父エチエンヌがブレーズに雄弁のレトリックを実行することを教えたことは十分推測できる。フュマロリが“Tradition rhétorique gallicane”で示したように、パスカルが得たレトリックの特徴は家族から来ている。デコットは次のように言う。パスカルがレトリックに関して取り組んだ大きな目標は、同時に表現技術であり、思考方法であり、また、行動方法でもあるような理想的なレトリックである。つまり、議論の方法に限定する学校教育の弁証法のような形式的議論ではなく、実践においても有効な雄弁の手段であり、また、心に触れ、説得し、心を動かすことのできる雄弁の手段でもある。<sup>23)</sup>パスカルが『プロヴァンシアルの手紙』で用いた戦略は、「説得術について」*De l'Art de persuader* という『幾何学の精神について』*De l'Esprit géométrique* の第2部<sup>24)</sup>に示されている原理からとられており、多分、1655年秋に執筆されている。

パスカルは「私たちが説きつけようとする事柄」にはさまざまのものがあるといふ。

「そのなかのあるものは、共通の原理と、承認ずみの真理から、当然の帰結として引き出されてくる。そういうものなら、人に説きつけることも間違いなくできる。それと承認ずみの原理との関係を示せば、どうしてもなるほどと思わずにはおらせないつながりが生じる。魂がすでに受け入れずみの真理とかかわらせたなら、これを受け入れぬというのは不可能である。なかには私たちに満足させる対象と密接に結びついているものもある。これらもまた、受け入れられるのは確実である。なぜなら、自分が何にもまして愛しているものの方へと連れて行ってくれるものであるらしいという感じを魂に持たせることができれば、魂は喜ん

でそちらの方に向かって行くに決まっているのではないだろうか。

しかし、承認ずみの真理にも、心の願いにも、どちらにも関係があるものだと、その影響力はこれ以上確かなものはないほどである。反対に、私たちが信頼も寄せられず、楽しさも感じられないものは、煩わしくて、いかがわしくまったく無縁なものにすぎない。<sup>25)</sup>

説得したいことを人の同意する原理に結びつける術は、パスカルによって「説き伏せる法」*l'art de convaincre* と呼ばれ、説得したいことを人を魅する対象に結びつける術は「気に入る法」*l'art d'agrèer* と呼ばれている。この2つの法全体が、説得術 *l'art de persuader* であり、「説き伏せる法」は精神 *l'esprit* に、そして、「気に入る法」は意志 *la volonté* に向けられる。

#### 1) 「説き伏せる法」 *l'art de convaincre*

パスカルは「私が説得の術と呼ぶ術は、もともと、完全に組織立った証明を行なう術にほかならない」と述べ、それは3つの主要部分から成り立っているという。すなわち、「はっきりした定義によって、用いようとする用語を定義すること、問題としている事柄の証明のために、明白な原理または公理を提示すること、論証にあたっては、つねに心のなかで定義されたものに対して、定義それ自体を置き換えてみること、この3つである」。「説き伏せる法」の『プロヴァンシアルの手紙』における展開については、拙著『パスカル「プロヴァンシアルの手紙」』<sup>26)</sup>で詳述している。ここではパスカルが「説得術について」のなかで挙げている次の3項目について述べよう。

#### (1) 定義 *Les définitons*

「理解し難い用語のすべてを、あらかじめはっきりと定義しておかないかぎり、証明しようとする問題を提示したり、その論証を試みたりしても、なんの益もない」。<sup>27)</sup>

22) *Œuvres Complètes de Blaise Pascal*, établis par J. Mesnard, I, p. 583, [37]

23) Descotes, *op. cit.*, pp. 15-16.

24) OCL, pp. 355-359.

25) *De l'Esprit géométrique*, OCL, p. 355; cf. 『パスカル著作集』(略号『P著作集』) I, pp. 221-222.

26) 森川 甫著『パスカル「プロヴァンシアルの手紙」』第2部第4章「パスカルの表現論」

27) *De l'Esprit géométrique*, OCL, p. 356. cf. 『P著作集』I, p. 224.

モンタルト<sup>28)</sup>は一般信徒にもわかるように、あいまいな神学用語を定義することを要求している。

## (2) 原理と公理 Les principes et axiomes

『説得術』において、パスカルは証明が「完全に明白で単純な原理にもとづかなければならない<sup>29)</sup>」と言う。『プロヴァンシアルの手紙』において、論証に必要な第1の原理とはキリスト教の原理である。また、「精神の原理は、自然な、だれにもよく知られたもの」であって、これが第2の原理である。

## (3) 論証 Les démonstrations

『説得術』においてパスカルは、「論証のために必要な規則はすべての命題を証明し、その証明にあたって、それ自体この上なく明白な公理、または、すでに証明済み、承認済みの命題だけしか用いない<sup>30)</sup>」と書いている。モンタルトの論敵<sup>31)</sup>は、この点においてもまったく反対で、問題点の多い命題を説明なしで用いている。

## 2) 気に入る法 L'Art d'agrèer

意志の原理は、「ある種の自然な願望であって、どんな人にも共通している。たとえば、幸福になりたいという願望であって、これは誰もが持たずにおれない。さらにまた、人みな幸福になろうとして追い求める多くの個々の対象もこれに属する。それらには私たちの気を引く力があり、実際は有害でも、意志を動かすという点では、真の幸福を作り出すものかと思うほどに強力である<sup>32)</sup>」。

「気に入る法」は、「説き伏せる法とは比較にならないほどに難しく、微妙をきわめ、また有用であって、すばらしいものである。したがって、私がそれを扱わないのは、自分にはその能力がないからである。また、自分とはとてもそんなことをするのに適した人間ではないと思うからである<sup>33)</sup>」。

「少なくとも、その能力を持つ人があったら、私の知っている何人かの人たちだけであって、他の人は、このことについて、それほど明るい、満ち溢れる光は持っていないと思う<sup>34)</sup>」。

パスカルはメレ<sup>35)</sup>を念頭において語っているであろう。『説得術』執筆時には「気に入る法」は扱っていない。しかし、姉ジルベルトの証言に注目しよう。弟ブレーズ・パスカルは「話して聞かせる相手が誰であろうと苦労なく、やすやすと話をわからせることができるようにものを喋る術」が雄弁であり、「話し相手の精神や心と、自分の用いる思想や表現がしかるべき適当な状態に配置されるか否かにかかっており、どんな言い表し方をするかによってのみ、全体としてうまく調和が取れるようになること」を理解していた。また、「何か思想を述べる場合には、いったん聞く人の側に身を置いてみるのでした」。そして、「自分の対面する人の気持ちになってこんなふうと考えて見るのでした」。と述べている。パスカルが作った「気に入る法」がはじめて用いられ、見事に開花したのは、『プロヴァンシアルの手紙』においてであった。パスカルは「説き伏せる法」には規則を与えているが、「気に入る法」には与えていない。説き伏せるのは、証明によるが、気に入るのは、楽しさを与えることによる。「楽しさの原理」が無数にあるように、その規則は無数である。この世にはさまざまな人々がおり、そのひとりひとりも変化する<sup>36)</sup>。

## (1) 楽しみの追求

パスカルは「第1の手紙」からすでに、読者を楽しみに誘っている。その末尾に、「こういう話を君が面白がっているようなら、これからも事件の経過をいちいち詳しくお知らせするようにしよう」と言っている。(「第1の手紙」)<sup>37)</sup>

28) Montalte パスカルの偽名。

29) De l'Esprit géométrique, OCL. p. 357.

30) Ibid. p. 357.

31) イエズス会の良心問題判例学者。

32) OCL. p. p. 355. cf. 『P 著作集』 I. p. 221.

33) OCL. p. 356. cf. 『P 著作集』 I, p. 223.

34) OCL. p. 356. cf. 『P 著作集』 I, p. 223.

35) Chevalier de Méré (1607-1685) フランスの作家、社交界でのパスカルの友人。

36) Cf. OCL. p. 356. cf. 『P 著作集』 I. pp. 223-224.

37) 1<sup>re</sup> Lettre, PC. p. 20. cf. 『P 著作集』 III, p. 23.

神学問題という一般には近づきにくい話題を扱いつつ、楽しみを見事に追求することに成功し、『プロヴァンシアルの手紙』は女性や社交界の人々にも競って読まれ、次の手紙の発行が待たれたのである。

## (2) 楽しみの原理

「気に入る法」をいかなる文学的ジャンルによって用いるかは、『プロヴァンシアルの手紙』の成否にかかわる重要な問題であった。パスカルは手紙というジャンルを用いて、無味乾燥なスコラの議論や良心例学者の論文を材料にして、快い、楽しめる教えの機会としたのである。

「気に入る法」を用いて書かれた『プロヴァンシアルの手紙』の表現の特徴は、活気 *vivacité* と多様性 *diversité* である。

### 1. 活気 *vivacité*

『プロヴァンシアルの手紙』で扱われている問題は、現代の関心からは非常に遠いものに思われるが、その表現の方法は今日でも傑作であろう。登場する人物はそれぞれ思想的立場を代表しており、モンタルトが訪問して質問すると、その立場の主張が明らかになってくる。<sup>38)</sup>

論文のような論理的規則に基づいた議論ではなく、対話によって活気ある議論が行なわれる。形式ばらずに、ずばり核心に入って行く。

感嘆、質問、いきいきした短い言葉が満ち溢れているが、手紙の末尾は急激に終わり、次回につなぐ。

パスカルは読者を退屈させないということを鉄則としている。モンタルトは「一口に言って現在、両派の間で論争的になっている点は何かを教えてくれないか」と頼んでいる。(「第2の手紙」)<sup>39)</sup>

### 2. 多様性 *diversité*

手紙の持っているエッセーとの共通の性格、すなわち、多様性をパスカルは大いに利用している。この多様性により「気に入ること」が確実に becoming。なぜなら、『説得術』で質問として

提出されていた「彼は何を愛するか」に答えることになるからである。「われわれは多様性を愛する」。(L. 270)

この多様性は『プロヴァンシアルの手紙』のいたるところに散りばめられている。

活気 *vivacité* の連続は読者に緊張を強いるが、この緊張は沈黙によって、緩和されている。「神父さんたちは黙ってしまつてウンともスンとも言わないのさ」。(「第1の手紙」)<sup>40)</sup>

キリスト教作家の義務は、真理のために作品のなかに楽しみを入れなければならない。「多様性を求めるわれわれの好奇心を満足させる」ことをためらわない聖書の神のレトリックをパスカルは真似るのであろう。しかし、笑い、楽しみのレトリックを真理に値しないものに用いる危険がある。パスカルはこのことに十分注意していた。『パンセ』にその規則がある。「雄弁。快いものと本当のものがなければならないが、この快いもの自体は、真理から得られなければならない」(L. 667)

パスカルは『プロヴァンシアルの手紙』における「楽しみのレトリック」を見事に駆使しているが、しかし、キリスト教の真理を教えることをなんら犠牲にしていない。真理を教えることと楽しみを与えることの両方の義務を果たしている。ジェズイットは逆にこの両方を欠いている。「説得術」において、パスカルは「承認済みの真理にも、心の願いにも、どちらにも関係があるものだと、その影響力はこの上なく確かであり、自然のなかにこれ以上確かなものは見いだせないほどである」<sup>41)</sup>と述べているが、この『プロヴァンシアルの手紙』において、「説き伏せる法」と「気に入る法」を結びつけようとしたのであろう。

## 第3章 文体と文章<sup>42)</sup>

### 1. 内容と形式

ギットン教授は話し言葉と書き言葉によって、私たちが自分自身を表現することに大きな努力を

38) Cf. 森川甫 前掲書 p. 134-138.

39) 2<sup>e</sup> Lettre, PC. p. 108cf. 『P 著作集』. III, p. 29.

40) 1<sup>re</sup> Lettre, PC. p. 17. cf. 『P 著作集』. III, p. 20.

41) OCL. p. 355.

42) Jean Guitton, *Le Travail Intellectuel*. 安井源治訳『読書・思索・文章』参照。

払っていることを指摘する。実際、雄弁術、セールスの技術、恋愛の技術、説得の技術等々がある。言葉には力があり、19世紀まで、学問の最高の目的は演説の技術、雄弁術を学ぶことであり、そのため、ギリシャ語、ラテン語を学び、古代の人々が自己表現をした仕方を研究、模倣しようとする努力をしてきたが、現代ではこの表現技術を以前ほど学ばなくなっている。大切なのは、話すことではなく、知ることであり、知ればおのずと話せるようになると思われている。

しかし、思考と言語の間には実質的關係、つながりがあり、思考と言語はどちらも私たちの存在を表す仕方であって、この両者は緊密な関係にある。一方に基礎を置かない限り、他方に秀でることは不可能である。むろん、空疎で内容のない言語が追放されるのは正しい。雄弁術というようなものは、法廷、議会、教会などは別として、一般に現代の人々の感性にとってもはや耐え難いものになっている。ただ、不幸なことに、これに代わるだけの価値あるものがないとギットン教授は言う。青年は実際、思想や理念などを内にいっぱい持っているが、これを他人に伝えることができないことがしばしばある。思想する青年たちが言語の使い方において拙劣になったことにその原因がある。と言っても、昔の「雄弁に戻らなければならない」というわけではない。その実質を温存しながら形式だけは現代の精神—昔の精神よりも活発で敏捷な—にマッチした新しいものにすればよい」とギットン教授は勧めている。

一部の人の考えによれば、形式は内容に対して付け足しだけのもの、いわば、飾りに過ぎず、したがって形式を考慮するのは、愚かであり、内容こそ大切である。ところが、学問は内容を授け、文学は形式を教えるものである。それゆえ厳密に言えば、文学などなくてもよいことになる。しかし、こうした見解は「構成、作文」composition—これは文学のみが教える作業である—の何であるかを知らぬものである。「構成する」のは、自分の思想を秩序づけ、その各部分、諸段階を探求することである。思想がその秩序および内面のリズムと不可分であるということが真実であると

すれば、「構成する」ことは、すなわち「思想する」ことである。

他方、論文を書くとき、あるいは意見を述べるとき、他人の理性に訴えるだけでは十分ではない。さらに、理性がその生命力を得てくる源泉、秩序そのものが生まれてくる源泉、すなわち、《心》に触れなくてはならない。この《心》に訴えるということは、容易な仕事ではない。第一、このような技術には法則がないからである。パスカルはこの法則を求めようとして、結局、自分の言葉を自分の心で実験してみる以外に、これという法則はないことを発見した。フローベール<sup>43)</sup>は、書き終えたばかりの文章を大きい声で読んでみるがよいと勧めているが、これも同じ理由からである。構成を求めるのは、真に近づくことであり、表現するのは、美に近づくことである。この2つの操作は、同時に行われる。なぜなら、美は真に近づく手段であり、また真は美のなかにおのずから輝きを放つからである。構成することは、すでに、平衡を求めること、したがって、真を求めることであった。表現することは、内面の秩序よりもいっそう内的な真実、そして、人間存在そのものの真理にいっそう似た真実を、言語によって表そうとすることであるとギットン教授は指摘する。

「文体とは言語に意味を付与しようとする操作である」から、文体を持つ作品ほど豊かな意義のある作品だとティエリ・モーニエ<sup>44)</sup>が言ったのは、けだし至言である。「美しい文体に見られる知的な美しさは、読者の精神にとって、その文の内容を成す美しさと同じくらい有益な、いや、おそらくそれ以上に貴重な真実である。」

文体は、結局、作者が作品に押す製造マークのようなものである。ある作品が読者に対して考えさせるといっただけでは、その作品が人間的な、血の通ったものにはならない。それを讀むと、おのずから作者の姿がにじみ出ているような作品こそ、真に生きた作品である。このことは学問的な作品についてさえ真実である。同じ一つのことを表すにも、いろいろな仕方があるからである。そ

43) Gustave Flaubert (1821-1880) フランスの小説家。

44) Thierry Maulnier (1901- ) フランスの作家、ジャーナリスト。



れゆえ、文体というものは、文章を修正することとは異なる。修正しない文章でも、それが無知からでなく、精神の展開運動から生まれたのであれば、美しいものである。文体は時間とも関係がある。古い昔の作品で、われわれが今もお読んでいるのは、真実を述べたというより、その文章が作者の自我をはっきり留めているような作品だけである。

## I. 国語教育<sup>45)</sup>

この分野でも形式と内容をはっきりわかる訓練が行なわれており、下書きを軽んじて、仕上げの文章と区別することが行なわれているが、こうしたことは止めさせるべきであると、ギットン教授は言う。文学的創作は、どの面から考えても、2つの段階、第一は真実を求める段階（内容）、第二はこの真実を正確な言葉で表す段階（形式）といったふうに分解できるものではない。つまり、内容と形式は混沌の中から同じ1つの努力によって生じるべきものである。それどころか、詩人たちの告白によって知られるように、逆に内容が形式から生じることさえある。われわれ人間は（観念に対しては、言葉に対するほどの支配力を持たないので、観念は言葉より少数であり、かつ抽象的、未分化だから）、この場合、言葉という鍵盤を押すことによって観念を出してくる。この原理を児童に応用すれば、まだあまり多くの観念を持たぬ児童に対して、彼の記憶のうちに多くの美しい形態を詰め込むのがよいということになる。もちろん、彼にとってそれらの形態は内容のない空疎なものであるが、彼は後になっておのずからその意味や用途を悟るであろう。独創的であるために必要な条件は、1つの言語をよく知ること、すなわち、古い構造に自己を適合させることである。それゆえ、およそ教育である限り、古典的、形式的でないものはなく、しばしば理解できなくとも学ぶように生徒に強制しないものはない。暗誦を要求しないものはない。確かに、また、児童の感覚に訴え、自主性を養成し、事物そのものに触れさせることも必要である。しかし、児童

は普通、暗記を嫌うものであって、これが最も有益な訓練であることを悟るのは天才的な児童だけであろう。しかし、1つないし2つの国語を自分のものにしない限り、児童は成人してから、世界を楽しむことはできない。彼は盲目に等しい。なぜなら、事物の光である「言葉」を所有せずに事物を所有しようとするからである。

では、言語を児童に教えるにはどうすればよいか。どんな種類の訓練によって言語に親しませるべきであろうか。このことについては、古今を通じて無数の書物がある。しかし、一番よい法則は、絶えず手本に接し、先生の元に入出入りし、おのずから浸透していくやり方であろうとギットン先生は言う。

## II. 文体

文体についての法則を追求してみると、「第2章 パスカルの説得術」でも見たように、それらの法則の大部分は人の気に入ろうとする欲求に基礎を置いていることが見出される。

読者の気に入る第一の条件は、読者の感覚器官の疲労を避けることにあり、そうしなければ読者を退屈させてしまう。たとえば、ある種の書き方でごたごたしているのが好ましくないのは、逆に言えば明快な表現は読者の知的作業を容易にするからである。節度とリズム感のある文章が、好まれるのは、節度とリズム感は、そこに思想が盛られている形式を予め読者に与えることによってその内容を予感させ、理解するために必要な努力を少なくするからである。ところがその反対に、モンテキュー<sup>46)</sup>やボードレー<sup>47)</sup>のような作家は、バランスの取れない破格の文章を書くように勧めるが、余りに規則正しいテンポは読者の精神を飽きさせるもので、驚きこそ読者を魅惑し、そしてリズムの破格はこの驚きを生じさせるからだというのである。ちょっと考えると、この2つの法則は正反対のように見えるが、実は同一の原理によって説明される。すなわち、要は読者という生きた人間において知性が働く条件に合致することであり、しかもこの人間の神経系統はきわめて

45) フランスの国語教育。

46) Charles de Secondat Montesquieu (1689-1755) フランスの作家。

47) Charles Baudelaire (1821-1867) フランスの詩人。

デリケートなのである。文体の技術というのは、丁度、ヴァイオリンの弓が弦に働くように、読者のこの神経系統に働きかけることにある。ここでもやはり、人間精神の能力には限りがあり、無用な努力を強いると、必要な努力が別のところで減少することを思い起こさなければならない。文体がこの必要な努力にうまく合致するならば、その文章が引き起こす快感は読者の耳を経て彼の精神に伝わり、読者は言語という媒体によって煩わされることなしに思想を捉えることができるであろう。もしも読者が言語、つまり、文章に引っかかって立ち止まったとしても、それは文章と思想の見事な一致感を楽しむためにほかならない。実際、思想という人間精神の孤独な結実と、思想を伝えるには余りにも不向きな人間の言葉の間に、見事な一致が生じるのはきわめて稀なことである。

### Ⅲ. 文章家

すぐれた作家は、一般的であると共に、類の少ないものでなければならない。単調であると共に、読者を驚かせるもの、平坦でありながら、時として近寄りたがいほど難解でなければならぬ。言い換えれば、自然を模倣しなければならない。つまり、自然は、単純、確実であるという性質と、時として道の曲がり角では人をびっくりさせるような何事かを出現させるという性質と、この2つを備えているのである。どの作家も、自分で素晴らしいと思ひ、とくに好んで用い、いわば、自分のトレード・マークになっているような幾つかの言葉を、自分のものにしなくてはならないであろう。話し言葉を繰り返し使ってもよい。シュヴァリエ・ド・メレは、次のように言っている。「美しい文章とは、様々な言葉を用いるよりも、むしろ一番優れた言葉を用いることにあるとカエサル（シーザー）<sup>48)</sup>は確信していた。そして、彼はある表現が気に入ると、飽かずにこれを用い、他人を飽かせることを気にしなかった。」

一部の人々は、うまく書けば書くほど、かえって読者に分かりにくくなると考え、専門家にしか理解できない用語を用いたがる。なるほど、難解な文章はほとんど宗教的な効果を発揮する。そう

いう文章に出会うと、それを理解するためにいやでも努力しなければならない。そして、あらゆる努力には、間違いなく利益がある。しかし、難しい文章が、難しいだけ余計に深みがあるという保証はどこにもない。ある哲学教師は、まず最初は、ごく分かりやすい講義案を書くのを常とした。それから、彼自身、「必要なわかりにくさ」と称しているもので味付けをするのであった。彼の考えでは、彼の商品が上級生徒の理性を刺激するには、この難解さが不可欠であった。確かに、彼の言い分にももっともなところがある。しかし、この分かりにくさという技術は、学校では教えてくれない。少なくとも、今日までのところでは、学校で教えるべきことは、隠されたいことをはっきり表現する技術であった。先生が生徒に絶えずする質問は、「一体、君は何を言おうとしたかったのか」という質問である。教師の理想は、西欧では、人と人の対話ができるように準備することである。そして、対話は、相手がいうことを理解できることである。ところが、もしこの「分かりにくい思想を持つ人」同士が対話するとすれば、この2人のめいめいは黙ったまま相手の沈黙するのを待ち、相手が黙ったら、今度は勝手に自分の意見を述べることになるであろう。

初心者には有益な助言としては、次のように言いたい。「はじめは、1人称で書きたまえ。《人々は》というより、《私は》というほうが、ずっと文章らしくなる。」小説家でも、最初、全体を膨大な告白のように《私》形式で書き、それから、3人称形式で書き直す。おそらくこれは、《私》という言葉を用いると、いやでも内部へ入りやすくなるからであろう。（パスカルは「自我は憎むべきものである」と言ったが、それでも「私は憎む」と言わざるを得なかった。また、着想が同じ程度であれば、何かを肯定する時よりも、反駁する時のほうが、静かな状態にいる時よりも、興奮している時のほうが、微笑している時よりも悲しんでいる時、暗鬱のことを述べている時のほうが、文章の力が強くなるものである。カトリック教会の公会議の宣言に見られるように、異端思想を否定する文章が力強いのは、そのよい例である。

48) Julius Caesar (前102-44) ローマ最大の政治家、将軍。De bello Gallico (『ガリア戦記』)

#### IV. ある学生への助言

ギットン先生はある学生に次のように勧めている。「文章を書くには、人に話すようにしなければならぬ。ただし、これは上手に話せるものとしてである。そして、前提となるのは、2つの相反した練習である。その1つは、自分の前に、知識はないが物分りのよい学生がいて、その人と話し合い、丁度、庭園か美術館を案内するような風に、君の思想を彼に案内してやると仮定することである。」フェヌロン<sup>49)</sup>は文章を書く時、いつもテレマックという人物に話しかけることを習慣にしていた。彼の文章がはっきりしているのはこのためである。デカルト<sup>50)</sup>は、もともと論理が通っていて優れた作家だが、王妃に宛てて手紙を書く形式をとるとき、いっそう優れた作家になる。同様に、ルナン<sup>51)</sup>も、姉アンリエットに宛てて書いたものが、一番優れていた。モンテーニュも例の『エッセー』を書き始めたとき、デスサク夫人に宛てた手紙の形式をとっている。

思想というものもまた告白である。ところが、文章はそのままでは表に表われようとしめないものを、自分から引き出そうとする努力を必ず伴う。ところが、親しい人への打ち明け話では、それがほとんど努力なしに行なわれる。そこで、セネカ<sup>52)</sup>やヒエロニムス<sup>53)</sup>がしたように、ある女性に宛てて語りかけるのが、理想的な法則ということになる。

この法則にはどこか柔弱なところがあるかもしれない。それで、その欠陥を補うために、友達と話し合う時、あるいは、自分自身と対話するときでさえ、ある程度正しい言葉を守るようにギットン先生は勧める。漠然とした、また、行き過ぎた用語を使うと、必ず損をする。それくらいなら、俗語を話すほうがましである。俗語は本質的には、私的な言葉だからである。《すごい!》というような言葉は、決して言うてはならない。もっとも適切な言葉を選ぶために、わずかな努力をすること

は有益なことであって、決してきざではない。なんでもないことを喋る時でも、人に気付かれないようにして、上品であるように心がけるべきである。結局、言葉を選ぶことに心を使うということになる。

このように、文章を書く時には人に話すようにし、人に話す時には文章を書こうとする時のようにすれば、どちらも同じだけの能力ができ、将来演説をする時でも、文章を書く必要がある時でも、表現の問題で心を悩ますことが少なくすむであろうとギットン教授は述べている。

それから、「君は、後で文章をどうを直すべきかどうか、そしてこの場合にはどういうふうにするればいいのか、私に尋ねたね。」ギットン先生はその学生に答える。「これを教えるのは、難しい問題だ。私の考えでは、1ページ書いたら、そのうちから、法則を忘れたために法則にかなっていないところと、その反対に法則を余りにも厳格に守りすぎたところを削るべきである。法則を無視することと、それにこだわりすぎることは、共に自然さを損なう。人間の行動においても、また、文章においても、改めることによっていくらかの成功を収めるには、私の考えでは、いくらかの距離をおくことが必要である。自分の内奥から出てきたものを判断するには、それが自分にとって、遠い第三者的なものになる時期を待つのがよい。」この点に関しては、パスカルの名言がある。「自分の作品を作りたてに検討したのでは、まだそれに全くとらわれている。余りあとからでは、もうそこに入っていけない。」(L. 21)

「君が私に尋ねてきた最後のこと、すなわち、哲学の文章はどんなふうに行けばいいかということだが、これにはさらに、正確さと論理的一貫性のために払う努力がある。」とギットン教授はその学生の質問にさらに答える。「もっと正確に言えば、《すなわち》などの言葉を用い、ジュリアン・バンダが勧めているように、接続詞(《なぜ

49) Fénelon (1651-1715) フランスの聖職者、思想家、文学者。

50) René Descartes (1596-1650) フランスの哲学者。

51) Ernest Renan (1823-1892) フランスの作家。

52) Seneca (BC. 55頃-AD, 40頃) ローマの修辞家。

53) Hyeronimus (340または、50-419または、420) キリスト教の教父、教会博士、聖人。聖書の翻訳家、釈義家。ヘブライ、ギリシャ宗教文化の偉大な伝承者。

ならば《したがって》《ところで》《それゆえ》などをはっきり示すべきである。むろん、哲学には、それなりの神秘があるはずだ。したがって、哲学の文章も、時にはあいまいな調子を用い、また、全く抽象的な起伏によって、文の高揚やイメージの増加をはかることがある。そうした例はプラトンにも、聖トマスにも、マールブランシュ<sup>54)</sup>にも見られる。しかし、現代ではアフォリズム（警句）の形式、重量感のほうが喜ばれるようだ。」

## 結 び

ある夜、ジャン・ギットンのところへ天使のような訪問者がやって来て、「生涯の終わりにあたって、今まで小さな声でも打ち明けなかった話をはっきりと書いて欲しい」と依頼した。そして、それをラ・フォンテーヌ<sup>55)</sup>が『寓話』の「序説」で述べているような仕方を書いてほしいと言った。ラ・フォンテーヌはまず第一に、その寓話が非常に短くなければならないということ、第二に、一瞬の幸福を与えるように、楽しいものであること、第三に（これは不可能だが、必須である。）心に触れる寓話であること。<sup>56)</sup>

この3つの要件は、この小論においてギットンが述べている勧めの要点である。

ギットン教授の勧めは、フランスや西欧の青年を対象としているので、日本語の場合を考慮するならば、私は文章作成に修練のために、短歌、俳句の五七調を習得する必要がある。かつて中学、高校で学んだ漢文、漢詩、また、俳句、短歌を学ぶことは、日本語表現力を養ってくれることであろう。私には残されている年月は多くはないであろうから、漢文、漢詩は割愛して伝統的で身近な俳句、短歌によって、言葉に対する感性を磨き、表現力を養うことを願っている。

「古池や 蛙飛び込む 水の音 芭蕉」

切れがあり、リズムがあり、山寺の静かな景色の一点に集中している。内容と形式が渾然と一体となって情景の粋を表現している。宗教的な境地

にも触れるような気がする。

「傾きて 桜を透す 西日かな 次郎」

この句が詠まれたのは、仙台か、山寺（松山町、現酒田市）であろうが、阪神大震災後、自宅再建までの1年数ヶ月、滞在することを許された<sup>はつかやま</sup>羽束山山麓の山荘の情景と見事に合致している。緑が豊かで、小鳥たちは毎日訪ねてくれたが、人家はわずか2軒だけで、隣家と2百メートル先にもう1軒あるのみであった。庭先の山桜の向こうが隣家で、高潔にして武勇の誉れ高い、英語学者の1名誉教授が、元女優かと思ふ美しい令夫人（実際は書家）とともに広い庭園と山林の中に住んでおられた。夕暮れの太陽は先生のお庭の方から、山桜を透かして、我が仮の庵に差し込んでくる。静かな、美しく、暖かい山荘生活のひとつであった。わずか17字の一句が、まさにその情景を捉え、自然と人の交わりの喜びを今も私に豊かに思い起こさせてくれる。

「ひまはりに 向ひて孫の 第一歩」

愚作であるが、歩み初めの瞬間を捉えて詠んでいるつもりである。リズムがあり、分かりやすいように思うというのは自画自賛である。赤ん坊は意識していなかったかもしれないが、向かった先には太陽に輝くひまわりの花が咲き誇っていた。

俳句、短歌の修練は日本語表現の習得の重要な学びの手段ではないかと思う。

思考と表現に関するギットン教授の勧めの最後にとりあげたいのは、教授が示している聖トマスの祈りである。

フランス語などヨーロッパ近世語にも、美しい詩はもちろん多くあるが、古典語にはさらに美しく、力強い詩があるように思われる。わずか6文字の聖トマスの3行詩は、見事に韻をふみ、リズムがあって美しい。ギットン教授がきれいなフランス語に訳されているが、邦語訳は前二者、とりわけ、ラテン語の詩のようにはいかない。聖トマスのこの詩は形式だけでなく、内容も素晴らしい。レポートや論文を書く時の、何か企てる時も、何事をする時にも大切な教えである。形式と内容が見事に表現されている詩である。

54) Nicolas de Malebranche (1638-1715) オラトリオ会々士、哲学者。

55) La Fontaine (1621-1695) フランスの詩人。

56) Jean Guittou, *Lettres Ouvertes*, 1993. pp. 9-10.

March 2006

— 19 —

Ingressum instruas  
 Progressum custodias  
 Egressum impleas (Saint Thomas)

Veille sur les préparations.  
 Surveillance les progrès,  
 Accomplis les fruits.  
 準備には心を配りなさい。  
 進歩にはなお一層、  
 その成果は成し遂げなさい。

聖トマス

#### 主要参考文献

- Guitton Jean, *Le Nouvel Art de penser*, Aubier, 1946.  
 ————, (渡辺 秀訳『新しい思考術』中央出版  
 社、昭和56年)  
 ————, *Le Travail Intellectuel*, Aubier, 1951.  
 ————, (安井源治訳『読書・思索・文章』中央  
 出版社 昭和56年)

- , *Lettres Ouvertes*, Documents Payot, 1993.  
 Pascal Blaise, *Œuvres Complètes*, Seuil, éd. Lafuma,  
 1963.  
 ————, *Œuvres Complètes de Blaise Pascal*,  
 établis par J. Mesnard, Desclée, de Brouver, t.I,  
 1964.  
 ————, *Les Provinciales*, Garnier, 1965.  
 ————, 田辺保訳・編『パスカル著作集』全7  
 巻, 教文館。1980-1984.  
 Descotes, Dominique, *L'Argumentation chez Pascal*, PUF,  
 1993.  
 Fumaroli, Marc, "Pascal et la Tradition rhétorique  
 gallicane" in *Méthode chez Pascal*, 1979.  
 Sellier, Philippe, <Rhétorique et Apologie; "Dieu parle  
 bien de Dieu">, in *Méthode chez Pascal*, 1979.  
 Le Guern, Michel, *L'image dans l'Œuvre de Pascal*, Paris,  
 1969.  
 森川 甫『パスカル「プロヴァンシアルの手紙」—  
 ポール・ロワイヤル修道院とイエズス会—』関西  
 学院大学研究叢書第95編、2000年。

## Thinking and Expression

—Professor Jean Guitton's Advice to Students—

### ABSTRACT

Jean Guitton, French writer, Catholic philosopher and great scholar of the 20<sup>th</sup> century, writes books on thinking and expression for students. He refers to many writers, poets, philosophers, above all, Blaise Pascal. Guitton agrees with Pascal's idea on man's dignity in thinking: <L'homme n'est qu'un roseau, mais c'est un roseau pensant.>

On thinking, at first, Guitton points out admiration and surprise as its motivation. Then, he shows two kind of thinking: judgment and imagination. And to develop the ability of thinking, he teaches 3 ways: to choose, to differentiate and to refute. However, his teaching is not to deepen skepticism, but to strengthen one's belief.

Regarding expression, Guitton gives advice about the mutual relations between the contents and the forms of expression, the style of sentences and the composition. Guitton exhorts us to write sentences as if we are speaking to a student who has not a lot of knowledge, but capable of understanding, with the prerequisite that we can speak well and clearly; in other words, to speak as if we are guiding a student through a museum or a garden. Descartes wrote in way that he would address a princess. Renan to his elder sister. Guitton advises to choose good and polite words. And in his last book, he gives the most important advice by citing the preface of the *Fables* of La Fontaine, that is, 1) to write short sentences, 2) to give pleasure to the readers, and at last, 3) (this may seem impossible, but it is necessary) to touch the reader's heart.

**Key Words:** Jean Guitton, thinking, expression